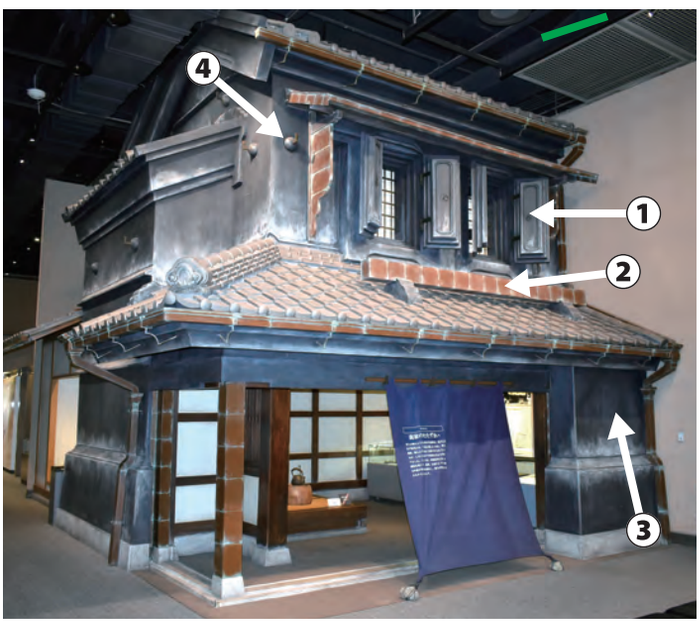
蔵造り建築　　新宿歴史博物館 常設展示解説シート❺

「江戸のくらしと新宿」のコーナーに黒いカベの家が建っています。正面から２階をみると、両開きでかいだん状の形をした扉があります。このような建物を「蔵造り」といい、とくに商店のものを店蔵といって、江戸時代から明治時代にかけて、江戸、東京でたくさん建てられました。店蔵はカベをシックイ（焼き消石灰､海そうを原料にしたフノリ､麻などを使ったスサなどをまぜてねったもの）でおおった火事を防ぐための建てものです。火事がおきると、２階の扉や１階の戸を閉め、すきまはその店に出入りしていた左官職人（かべぬりを仕事にしている人）が土でふさいだといわれています。江戸では、カベは黒いススをまぜたシックイでしあげられ、シックイのあつさは 30cm になるものもありました。

蔵造り商家（店蔵）の特徴



① 観音開扉

２ 階の窓は左右両方にひらく観音開扉となっています。多くの蔵造りたてものの窓は観音開扉になっており、蔵造りを見たときにめだっているところです。扉と建物の枠はそれぞれ階段のように段がついています。扉をとじたとき、きっちりと閉められます。火事のさいには、この扉の内側に店側から防火戸（土戸）をしめ、観音開扉をしめます。さらに観音開扉をしめた後のすきまは、その店に出入りしている左官職人が土や砂をぬってうめてしまいます。

② 目塗台

観音開扉の下、１階の屋根の上にある細長い柱が目塗台です。火事がおきたときに観音扉をしめたあと、出入りの左官職人が扉のすきまに土や砂をぬって、すきまをうめる作業をするためにあります。目塗台は火事がおきたときのものであるため、出入り職人の仕事が終わった後は焼けてしまってもよいため、木で作られている場合もあります。しかし銅の板でくるんだり、シックイがぬってあったりと、たてもののかざりとなっているものも見られます。

③ 戸袋

火事がおきたときには、戸袋に入っている防火戸を出し、店の入り口をふさぎました。防火戸は表面をシックイでぬり、外枠は鉄などの金属を使っていました。ふだんの戸のあけしめは店のなかにある木でできたあげ戸を使いました。

④ ツブ・折釘

建物のカベに、シックイを半分の玉の形にもり上げ、そこに折れた太い釘が出ているものを見ることができます。この太い釘が折釘で、シックイがもり上がったものはツブです。折釘はカベを直すときのはしごや柱を止めたり、他のたてものを追加してつくる時に使われます。折釘に何らかの重さがかかったときに、ツブがこわれるだけでたてもののカベがこわれるのを防ぐようになっています。また、折釘は鉄でできているので、サビによる湿気がカベ内に入らないようになっています。折釘はあとになって蔵造りたてもののカベに打てないため、あらかじめカベの中心にある芯に折釘をうち付けてからカベをしあげます。